

浄土

十二月号

特集 アミタ信仰論争



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一冊一頁) 昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別携来品) 第三十三号 昭和三十八年十一月二十五日 印刷 昭和三十八年十二月一日發行

第二十九卷

第十二号

◇ 浄土トラクト 新刊 ◇

大正大学助教授 宮林昭彦著

浄土宗の

新書版 二十頁

二十部以上 一割引
五十部以上 一割五
分引

おしえ

定価三円二十円

百部以上 二割引

一、仏教について

四、おつとめの仕方

二、法然上人

1 お寺と檀家

三、浄土宗のおしえ

2 焼香と焼明

1 浄土宗を開いたわけ

3 合掌

2 あみだ仏と極楽往生

4 読経と十念

3 念仏と往生

おわりに

大正大学教授 村瀬秀雄著

新書版 九十頁

再版 日常勤行式の解説

定価百円 二十部以上 一割引

申込先 法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

—— 明るい生活への葉り ——

三十九年度版ひめくり

こころの歩み

B 判
十七枚綴

価格 七〇円 千三〇円

体裁 タテ 38 CM ヨコ 13 CM

(三十九年度日曜表付)

割引 一〇部以上 六三円

五〇部以上 六〇円

百部以上 五五円

送料は実費

(百部以上送料無し)

再版

修養ひめくり

B 判
三十二枚綴

価格 一〇〇円 千四〇円

(一〇〇部以上より二・五割引)

申込先 法然上人鑽仰会
発売所 大道社

東京都千代田区飯田町1の21
振替(東京)82187 電話(332)5944

浄土

十二月号

念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。

法然上人御法語



—◇目次◇—

表紙 国宝、薬師寺五重塔水煙

〔特集〕 アミダ信仰論争

アミダ信仰論争の経過と問題点……………編 集 部… (2)

アミダ信仰論争アンケート解答…………… (5)

座談会 アミダ論争をめぐる…………… (9)

念 仏 と 唱 題 ……………岩 佐 貫 三… (12)

襟を正す—ありのままの宗教(4)—……………洪 谷 賢 応… (16)

体験談 尼寺の保育園とバス ……………近 藤 正 善… (22)

近代高僧伝 大 島 徹 水……………大 橋 俊 雄… (24)

御法語をいただく…………… (33) 浄土の動き…………… (32)

墓地問題(学会手引き)…………… (20) 表紙の解説…………… (19)

読者通信……………小 浜 道 昭… (21)

一休起請文 学 者 と 念 仏 ……………村 瀬 秀 雄… (26)

アミダ信仰論争の経過と問題点

— 編集部 —

最近、渡辺照宏博士が「大法輪」の六月号誌上で「アミダ信仰はどこで作られたか」と題する一文を掲載されたが、それに対する反論が「中外日報」を中心に掲載され、はなやかな論争がまき起こされたことは、まだ記憶に新しい。かりに「アミダ教」が渡辺博士の力説される「インド」であろうと、東アジアであろうと、浄土信仰になんらの影響が与えられないことは言うまでもないが、この所論によって研究と信仰を混同して、その口吻を容れる人々のためにも、一応、今までの経過を知ってもらうことは、決して無意味なことではなく、再認識の上からも必要なことである。

浄土經典がインドで成立したとか、東アジアで成立したとかいう見解は今までに数多く発表されていて、一定した結果

は出ていない。このことは正確にその地域を決定できる資料に欠けていることを示している。また、インドという地域がどこからどこまでをいうか、これも時代によって大きな相違がある。たとえば、クシャーーン王朝は東トルキスタンからインドまでを一番の勢力範囲としていたし、現在のアフガニスタンなどはその中に含まれ、むしろ、当時、もっとも隆盛な地域でもあった。従って、多くの仏教僧は西北インドからこの地方の間にまで往来し、新勢力と相俟って新しい息吹きを示したことも十分に想像されうる。とすれば、何を基準にインドの地域を限定しようかはまた問題が残されることになる。今、これらのことを別にして、これまでの論争を振り返ってみよう。

渡辺博士は浄土三部経がインドで成立したものでないということを力説するために、その所論の多くを費しておられ、その帰結とする諸点は、(一)「アミダ教は明らかに仏教とは教理が違い」、また(二)「インドにおいて実際に行なわれていたという確実な証拠はない」ということ。さらに「西方と仏とが二重うつしになってアミダ仏の西方極楽浄土を信仰する新しい宗教が東アジアで成立した」ということ。これらの点から、大乘仏説、非仏説の論議の対象にさえもアミダ仏教はならないと述べられている。

これに対して、もっとも学的立場からまず反論を示されたのが大谷大学の舟橋一哉博士であった。舟橋博士は浄土三部経がインドで造られたものでないという渡辺博士の見解には「直ちに賛成もできないし、反対もしない」が、ただ「あれだけの資料で、インド製作を否定することは、少しく早計にすぎるようである」とし、確実な根拠をもたない現状ではインド製作を疑う程度であって、断定すべきでないと論じておられる。さらに、博士はむしろ問題になるのは地域成立の問題ではなく、「本来の仏教」という渡辺博士の説が何を指しているかに問題があると提議される。いいかえれば、仏教の本質ならびに本流は何かということになることを力説している。その論調は、師資相承なき浄土教はこれだけでも仏教の

中の異端だときめつける渡辺説を枝葉末節だとし、「大事なことは仏教の根本精神をその時代時代に応じて、どのように表現するか」にあり、そこにこそ「仏教本来のすがたを問題にする手がかりがある」ことを述べ、再考を促している。

続いて竜谷大学の月輪賢隆博士から經典に関する詳細な論証がなされ、これに対して渡辺博士との辛辣な論争が繰返されるに至った。月輪博士は、インドにアミダ仏像が有るとか無いとかは問題にならない、と説き、中国僧の旅行記を援引しながら、博引傍証これつとめている。しかしながら、渡辺博士との論駁は、最後にはお互いの齟齬もあって、言葉じりを捉えての論難は、少しく冷静さを欠き、読者をして興味を湧かせても、必ずしも学的態度とは見えない節のあったのは、やはり遺憾としなければなるまい。この両者の經典問題を別の観点から注意してみれば、渡辺博士が「大般若経や大宝積経や大華嚴経にしても今漢訳にみるような集成した形でインドに存在したことは知られていないから、少なくともこれらの編集は中央アジアでできたと考える他はない」とする根本的態度にかかっている。渡辺博士の見解はそれ相応に經典成立史についての一つの立場が示されているからである。これは今の論争に直接的ではないとしても、その研究態度を同一の場所において論じないと、一面的にしか受けとれない

結果にもなる。このことは留意しなければならない。渡辺博士のこの見解は、「大乘仏説非仏説論の考察」にも連がるもので、今後の発展を俟たないと言に片づけることはできないものがある。ともかく月輪博士の詳細な經典考証とそれに対する反論は興味を誘うに充分であった。さらに京都女子大学の宮地教授の論争に関する整理も有益なものであった。これのみではなく、さらに浄土系の人々から多くの意見が寄せられたことは、單なる傍觀的態度としてではなく、自己の信仰の現われとしても賑やかに紙上を彩ったことになる。

しかるに、渡辺博士は「中外」誌上で、「反論に対し要点をまとめる」中で、アミダ信仰の定義を述べ、法蔵比丘の誓願、その法蔵が阿彌陀仏として現に西方極樂にいる。しかも南無阿彌陀仏と唱え往生する、という形の信仰はインドで行なわれたことがなく、インドも現在のインド・パキスタン・セイロン・ネパールと限定すると規定された。さらにアミダ信仰という宗教現象が、実際にインドで行なわれなかったことを三点に要約して述べている。すなわち、「大法輪」誌でもっとも説明に力を注いだ、經典成立そのものより、宗教現象に中心を置き換えたと見るのは編集子の單なる僻目であろうか。地域性の問題は論外ともなろう。しかも、舟橋博士に對しては「無我論はこれとは話が別」であるとしてふれては

おられない。従って渡辺博士の眼目は經典に述べられているような信仰はインドになかったものであることを中心にされ、經典の成立そのものも、さらには浄土教が仏教の本質であるかどうかも二の次とされているように受けとられる。ここに論旨のズレを感じさせる。しかしながら、博士はシャイエルなどの含著ある大乘仏説に共鳴して、新しい立場で仏教を意味づけようとされるらしい。それには敬意を表するが、岩波新書「仏教」に示されたような一貫した立場？があるとするれば、それを理解して渡辺博士の所論を受けとらなければ、論理はただ平行線をたどるだけで無意味となる。詳細な反論は立場立場で説明もされよう。また、博士のいわゆる限定されたインドに浄土教が成立、いや浄土信仰が眼前に展開されなかったから、仏教ではないと断言されるだけでよいものなのであろうか。問題はやはり、仏教の本質論にしろられてくると思う。それ以外の反論は主旨を惑乱しかねない。ひとりよがりの反論も論理的明確さを欠けばまた逸脱したものともなる。学的にどうあろうとも、主体的經典把握が根底になければ浄土教徒と言えないことはいうまでもないが、一面、学的冷静さをその中に包容する度量も必要となる。これをよい機会に我々の信仰論理を明確にし、さらに教學の発展を切望するゆえんでもある。

アミダ信仰
論争アンケート

解 答

- 1 渡辺博士説についてのご見解
- 2 現在の論争についてのご見解
- 3 その他これに関連しての仏教界についてのご意見

○ 稲葉秀賢

(大谷大学教授)

1 それぞれの専門的研究者が学究的情熱から、自分の立場にややもすると偏向的傾向のあることはある程度免れ難いけれど、渡辺博士の説には印度仏教に対する偏向、或いは宗派的偏向が感ぜられる。中国や日本に行われた仏教に対する、もっと公平な理解が望ましい。

2 舟橋博士が本来の仏教とは何を指すかという指摘は、この論争の焦点を衝いたものである。本来の仏教即ち印度仏教に対する偏向が問題の起りではないであらうか。

月輪博士の論難は多くの資料をあけておられ、教えられる所が多いことに感謝している。

3 渡辺博士が何故こうした意見を發表せられなければならなかったか、その心情が仏教界に与えられた一つの課題であるように思う。その論文が大法輪に發表せられたことからも、それは学問的情熱と受取れないのは、私のみであらうか。

○ 大野法道

(文庫、鎌倉光明寺法主)

1 アミダ仏研究の角度は無辺際に可能である。しかし大日如来を中心とする五仏の一

として理解されるとは(→本筋から逸脱) (→)時代錯乱 (→)原理ならぬ応用にすぎない。

2 要義の顕彰随所に見らるるも、全体として論説多端、論旨混雑、論調乱離、時に眼を掩わしめるものがある。

3 論争は沈滞打破の良策である。堂々たる論陣の盛り上りを望む。

○ 小沢勇貫

(大正大学教授)

1 ネパール所伝の梵本無量寿経をすべて疑い、更に古い成立の伝訳諸本を不問に附するのはどうか。また章樹・世親の論書や、竺求法僧が見聞した記録もないことから、疑をもつことは可能であらうが、弥陀信仰が東アジアとか中国で成立したとするのは連断だと思ふ。阿弥陀仏教が本来の仏教とちがうとする説は宗学として容認せられないことで、充分論議したい所だが、教理の本質論になると、夫々立場の相違も出て来てむずかしくなる。寿経の成立地は明確にきめられないが、

原初本は大乗最初期のものであり、此經に菩薩の行願を説き、仏の慈悲救済を説いて教への体系が既にできていたことは、看過されてはならない。法華經等に極樂往生の信仰を説くのも、当時その信仰が流布していたのを無視し得なかつたからである。

2 月輪氏等が提示された資料の多くを渡辺氏は軽く見ているようだが、疑問を経典のことよりも、ミダ信仰をもった個人かグループが果して印度にあつたかどうかに向け、やや態度を変えられたようだ。歴史とともに発展した仏教は亭々と喬木のように育つたもの、教理思想の本質を論ずるのには、一本の木全体として見なければならぬ。

岸 覚 勇

(仏教大学講師)

所感 渡辺照宏博士のあの浄土教の否定的論法は、所屬宗派を異にする所より生じた一種の偏見に基くものである。仮りに浄土經典が仏説でもなく印度産でなくとも、我等浄土

教徒の信仰は微動だもするものではない。大經に説く三垢消滅も、觀經に説く去此不遠も阿彌陀經に説く十万億刹の彼方に在るも、みな光明、吉水の信仰に基いて一心念仏する時我等浄土教徒にはいつでも納得し得るからである。即ち一心に念仏する時、善導の説かれた如く如来と親しく近きを実感し、また法然の言の如く唱うれば極樂の聖衆に同じき法悦にひたり得るからである。

大乗起信論が印度馬鳴造でなく、たとえ支那撰述であつても、毫も其論の価値を輕減するものでないと同様に、浄土經典も非仏説であつても、中央アジア産であつても、また支那出来であつても、我等の信仰として領納し得る限り、何等の痛痒を感じないのである。

然しあの浄土教否定論文を発表した渡辺博士を向きになって憎む氣にも、また攻撃する氣にもなれない。我等もまた浄土教とは信仰を異にする宗派に屬する者であつたら、あれと同じ態度で浄土教否定論を発表したかも知れないからである。

北 村 謙 順

(神奈川・西念寺住職)

1 ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに仔細なきなり。

2 ただ念仏のみぞまことにておはしますとこそおおせはそうらしいか。

3 他ノ有縁ノ教行ヲ輕毀シ自ノ有縁之要法ヲ讀スルコトヲ得ザレ 即チ是レ自ラ諸仏ノ法眼ヲ相ヒ破壞スルナリ 法眼既ニ滅シナバ菩提ノ正道履足スルニ由ナシ(善導大師の御指図)

佐 藤 密 雄

(文庫、大正大学教授)

1 何が仏教の本流であるかは、問題のとなえ方にもよるが、仏教学としても定説がない筈である。従つて、現実にある仏教を二十

数世紀の仏教成長の成果とすべきである。渡辺説はこの点から見て、いささか奇矯に過ぎると考へる。

2 論争は止めるべきである。後向きの主流論よりは、前向きの、あるべき仏教は浄土教か密教かを争うべきである。

3 現在の日本仏教僧はすべて在家の僧形であるが、在家の僧形が実践出来る仏教とその実践道を論ずべきかと考へる。

須藤隆仙

(前掲教名寺執事中外日報編輯支局長)

1 私見では渡辺説は(一)浄土教は仏教の本流でない(二)古代インドにはミダ像などなくシナのインド訪問僧もミダ信仰を記録していない(三)浄土三部経も十住論も往生論もインド撰述でない(四)インドの念仏は観想で称名でない(五)ミダの西方浄土は中国からインドを想倒して二世紀以後に東アジアで成立した(六)浄土教は釈尊以来面授の相承でなく仏教の異端である。等々の六点と思う。そのい

ずれも誤説の甚しいもので渡辺説こそ非仏教の邪説であると判断する。

2 私見では(一)仏教の根本は転迷開悟で、

(渡辺説は六波羅蜜十波羅蜜三学などを仏教の特色というが、それは道法「実践の一端」で根本義は転迷開悟)転凡入聖で、それが凡入報土であり、浄土教こそ仏教の本流である(二)仏像製作は仏滅後二百年くらいからで古代インドの仏像だけで信仰状態は限定できない法顕・義浄など楞明浄土經典を訳しており、慧日はインドでミダ信仰を確立して浄土三流の一祖となったほどで渡辺説は仏教信仰の実態を知らない。(三)宇井伯寿博士は浄土經典は内容構成の素材からみてインド成立のものといっており、十住論や往生論の真撰なること学界的定説である。柳章樹の易行道は称名不退思想で、称名はインドにもある(阿含にすでに称南無仏とある)(四)諸大乗經に仏世界を西方極樂の如しと説くもの多く、西方ミダ浄土説は東アジアで誕生したものではない。(五)伝法には面授と内証あり、浄土は内証の相伝で形式より真義を重んずる大乘の模範である。等々の考えからこの論争は悉く渡辺説の

自滅と見ている(渡辺説は外道の学説で仏教の宗教面を知らないでいる。)

千賀真順

(仏教大学教授)

1 原典学の造詣深い博士の立論も余り独断的な論旨が多い。もう少し浄土教の始源についての理解を下さる必要があると思う幸い先徳・先輩の秀れた多くの論者もあることだし、そういうものを見てもらって「諸經所讚多在弥陀」の評価をしてもらいたいと思う。即ち人間の宗教としての浄土教を認識願いたいものです。

2 学問的論争まことに結構である。関心をもち宗門・学徒に大変よい反省と研修を促すものがある。併し論争には学問的忠実さは勿論ですが、同時に法然上人が「各宗に各々一切経あり」と言われたように、各この立場を理解・尊重して堂々と論争することは、学問のため願わしいと思う。

3 現代の仏教界は体質改善を要する。仏

教界は釈尊に基調するから宗派の如何を問はず、仏教としての一貫した特質の上で宗意安心の尊重が望ましい。例えば仏教徒文化会議のようなものを推進して全仏的な決議のもとその実践を念願するものである。

塚 本 善 隆

(文博、京都博物館々長)

1 渡辺博士の説はよく存じませんので、お答えできません。但しアミダ仏経が釈尊説でないように、日本で仏説経として各宗の所依となっている仏経はすべて釈尊説でないというなら理解もでき賛成でもあります。アミダ仏経だけが釈尊仏教でないとの説なら賛成できぬ。

2 大乗経が第一世紀前後から後に次第に成立していったものであることはもう常識ですから、仏説だ非仏説だなどの論争には興味もなく大した注意も払っておりません。

3 (一)どの日本諸宗も所依の経を唯一權威として、これにかじりついて自宗の正当性と

か釈尊仏教を説くようなことは清算せねばならぬ時になっていると思います。各宗々学は別の立場から新たに説かべき時でしょう。(二)現代人が宗教について質問する課題に、現代語で世界の良識ある人が納得できる論理で宗教を説くことが宗学でしょう。

月 輪 賢 隆

(文博、龍谷大学名誉教授)

1 一事として納得の出来る論議はございません。全く独断とデタラメとに充ち満ちている。それに対する反駁は中外日報で数回にわたり申し述べました。

2 これについて、ある日蓮宗の高僧からも、また真言宗の碩学からも激励のことばや對手への酷評を聞きました。曰く「あれは正気の沙汰でないから、よい加減にやめておきなさい」と。私もしばしばこれは先生、本気で云われているのではなからうかと思いましたが。

3 しかし又、眠りかかっておる仏教界、

殊に阿弥陀仏に漫然とした信仰をもっている者にとつては、よい刺げきになったことと思うて感謝しています。

友 松 円 諦

(神田寺主僧)

1 渡辺氏の御見解は氏個人の二見の約にすぎず、恩師仏人ピチルススキー教授も弥勒思想のベルシヤ起原説をときたること有之、学説としては大いに自信のある人はとくがよろしく、ただ渡辺氏の場合は何ら史学的にきめ手と申すもの無之、浄土門の学者達が馬鹿さわぎをいたすこそ笑至と存じます。

2 今日の日蓮宗の現況にては、共に水かけ論に有之、もつときびしく仏典そのものの成立年代・地方の研究をいたすべきで今日の学人の怠慢を責めたく存じます

3 大法論とか、中外とか、こうした商業出版物の企画におどつてさわぎ立てることは学人・思想家としてはきかたない存じます。

(この項、三ページにつづく)

アミダ論争をめぐって



問題の所在

A 渡辺照安氏の「アミダ信仰はどこで作られたか」(大法輪三八・六)という論文はとくに浄土信仰をもつ人びとのつよい関心を引き、さまざまな意見や反論がでた。しかしこれに対して、浄土宗の側からは一向に発言がない。別に目新しい発言ではないとして黙殺してしまうことも一つの方法であるが、これを機会に、もう一度、こういう問題のおこる所以をきわめ、自分自身の信仰をたしかめることも必要なことではなからうか。

そういう意味でお話を進めていただきたい。

B いまから五・六十年も前に、アラヤの問題で論争を展開したことがある。アラヤは無着、世親からのちに出る、八百年又は九百年にでるという説に対し、私は原始經典の中に出てくる。従って、早ければ滅後百年、遅くとも三百年には出ている、といった。このことが東西間に大きな論争をおこした。その後、アラヤのつぎにアミダの問題がおこった。それは、河口慧海氏が問題を出した。そ

のとき、チベット語の問題としてはそれでよいが、經典史上の問題としてみると、出家が仏教か、在家が仏教かという問題について間違っている、と指摘した。その後はじめて、渡辺氏が、その当時含んでいた問題を五つ六つ並べて独断的なものを書いたようである。

浄土經典の成立はインドではないか

H 最初、渡辺氏は「浄土經典の成立は西域であってインドではない」ということの問題を中心的に扱ったが、のちに「アミダ信仰が実際にインドで宗教儀礼としてあったか、なかったか、ということが問題である」として説かれ、むしろ焦点のズレが感じられる。

A その最初の論とあとの論が変ってきたということは、何を意味するのだろうか。

D それは—無量壽經がインド成立ではない—と云いきるには、多少無理がある、と感じたからだろう。

F ないとも云えるし又、それならば、あると云えるという根拠と同じくらいではないかと思う。過去の宗乗というか、私たちの大

先輩たちが、はじめ浄土宗の信仰は、インド仏教の正統であるという点に、創立当初は力を入れたが、私たちとして考えてみると、浄土宗の信仰は、法然から出発していると思う。だからその問題と渡辺氏とは別ではなからうか。渡辺氏の場合、最初アミダ経がインド蓮述であるか、ないかどうかを中心であったのに、のちそれが全然入っていない。そのことについて少し考えてみたい。浄土經典が、インドになかったということについて、丁度、金剛般若經に、燃燈仏と国土莊嚴という文字が出ている。そもそも般若經は要するに自分以外のものを破斥することが立前の經典であるが、そこに浄土教的思想があげられている。ということは、金剛般若經があった時に浄土教が、信仰として、又は学説としてあったと考えられる。そして浄土教があるから、このようなことは非真理である、というように金剛般若經にも出ている。

浄土宗学ではどうみるか

A 浄土学あたりでは、この論争をどうみるか。

E 渡辺氏の説は宗学以前の問題が多い。無量寿經は、般若經とならぶ初期大乘の經典であると思う。大小アミダ經が、インド成立でないと断定しているが、道行般若でも小品般若でも、多方浄土に往生するという信仰がはっきりでている。

D お釈迦さまにあった人、五比丘をはじめ現身の仏にあった人は、全部救われている三千年の仏教の歴史のなかで、仏となり自証したものがあるかどうか。これは仏にあわず修行することのむずかしさを語っているものであろう。結局、現に仏を見たてまつると云うのは、修行をせずして救われるということである。般若三昧にしろ、觀經にしても、極楽に往生して、現にアミダ仏を見たてまつるということは、そもそも仏教のはじまり以来、現身の仏にあって教化をうけることに、仏教の主流をみるのではないか。

浄土教は仏教の主流ではないのか

E 經典の地域はともかく、無量寿經が初期大乘のものとして、浄土教が仏教の主流で

あるという点についてどうだろうか。

A 渡辺氏が、無量寿經、阿彌陀經の原本がインド伝来の梵本であったという積極的証拠がないといわれるが、インドのものでなかったという証拠もないわけであらう。

D 浄土教では竜樹のよんだものは、なんであったか、つまりアミダ仏の教えをしっていたかどうか。

E 般若三昧經については、はっきりしているが、大小無量寿經については、はっきりいえない。きめてがない。

D 浄土論は、たしかに無量寿經の浄土論だろう。

E 時代的には、無量寿經は成立していたと当然考えられる。經文は少しも引かれていないが、山口益氏が優波提舍について認めていたが、あれは、經典を正しい方向にむけて説くとか、あるいは人間の方に近づけてとくための努力だ、といわれているが、みなそういう努力をしたにちがいない。經典の伝訳の場合でも、もし先きに訳されたものがあれば、先輩の訳出したものを参考にしたり欠けたところを補ったりして敬けんな態度で 仏

説のものとして信じて扱ったに違いない。いまの扱い方とは異にするのではなからうか。渡辺氏が古い漢訳をみていないことも残念に思われる。

F 渡辺氏の言葉の裏は、インドにできたものが正流であるということだ。それに対し浄土宗は本質をとらえるものであって、インドのところに端的に細かく經典や論の文字がなくとも正流であると考えられよう。法然土人が「觀念の念にもあらず」等といましめられて、「思いわずらうことぞなし」といわれているが、これなぞ仏教の有にもあらず、無にもあらず、という中道とびつたり同じように思う。ここに仏陀の主流を浄土宗は本質的にうけとっているんだと考えている。

やはり、浄土宗が開かれるときには、過去の經典を引いて来て、浄土立宗の根拠をのべられなければならないけれども、いまは厳然たる浄土宗であるから、仏教が浄土宗の中には、こんなに生きているんだ、ということとを鮮明にする必要があると思う。

今後の問題

C いまの話を聞いていて二、三感じたことを述べると、經典をすすめる論は、論として成立すると思うが、實際信仰として、たとえ一切の経をよくよく学すとも、といわれるから成り立つかもしれないが、しかし一応は經典による必要がある。時代と共に変わってこなければならぬが、もっと社会的知識をすすめる、經典研究をすすめる必要がある。すると、法然上人をもととする立場でいましめなければならぬことは、上人が經典を間違つてうけていることである。それが、あの時代だからあれでよいとして、今日の課題、歴史的な經典の理解の仕方がわかってくる。

日蓮宗が、日蓮上人のつよい立派な遺文をみると、歴史問題で間違つたがため、内輪ケンカがおこり、やがて極端なところで創価学会が生ずるようになった。法然上人の一番の間違いは、開元仏教によつたがためである。もっと道宣と善導の関係を明かすことにより新しい道が明かになると思う。

心のぐらつかぬという問題でも、意業としてぐらつかぬとしても、それは心理学や哲学者から正面より反対されると思う。その反対

は大した議論ではないが、何といつても、まだ日本の思想は、明治以来の思想の影響がつよい。精神界と物質の問題をどうきめるかは別として、この問題にしばらくいられている。仏教は少くともこの問題ではない。物心一如の動き方をいっているから、意業の問題がおこるが、それが世間の人に対してどう解けているか、どうか。更に、浄土宗が仏教の主流かどうかという問題、無我無所得の仏教は、主流は浄土であり、浄土に生きることであると思う。即とか一如といつて生即無生無生即生という事は哲學的解釈のおもしろさはあるが、自己の信仰、社会の信仰として立つには不十分である。それは浄土がいまままでの指方立相でつかんでいるものではなく、行ききれないで、死んだらそれで済むというが、思想的にはそれではゆききれない。もう少しはつきり解決が要求される。

さきころアミダ論争をめぐって、浄土宗の立場より、その問題の所在について、かなり専門的な意見の交換をした。ここに、そのごく一部を紹介したものである。なお出席者は左の各先生である。

樺尾弁臣 河川貫達 福田登界 石上善応 小沢勇貴
堀村玄昇 佐藤密雄 宮林昭彦 安居香山 真野竜海

念仏と唱題

— 現代及び現代仏教批判を通しての —

ある在家仏教者の告白 —

岩佐貫三

(倭成図書館長
前倭成学園校長)

かつての「天皇陛下万歳」が戦中派、戦前派の人々に何かしら呪力なり、霊的な響をもっておったことは事実である。そして現天皇による人間宣言という歴史的改变を境として今日の変貌ぶりを思えば感無量なものを覚えるのは強ち私一人ではあるまい。呪力と国家の權威のむすびついた結果は如何に非人間的な不幸な事態を将来するかは多くの歴史上の事実が教えるところである。同時に祈りなきところに眞の宗教の存し得ないことも事実である。今、一介の在家仏教徒として念仏と唱題という如き大それた論を為すことを面映ゆくも思うし、所詮は素人考えの範圍を一步も出ない議論に終ることを恐れ乍ら、筆をとる。

鎌倉仏教の特質を近代的思考にむすびつけた時、まず考え

られることは専修思想の徹底ということであり、一面では末法觀の克服があり、又呪術性の一様の否定ということがあることは論をまたないところである。当時の大衆の心に深く入り、しんとした事は、一面「称へ易きが故」(大原問答)のお念仏であり、さればこそ「一心にもはら弥陀の名号を念じたまう」教えであつたのであろう。

近頃、東洋大学教授の渡辺照宏先生があるPR雜誌に「念仏」の念という漢字は果して羅什、真諦、玄奘等訳經當時はどのような原義を持っていたか、恐らく今の日本人の考える念の觀念と程遠いものがあつたであらうとせんさくされておられるが、私にはあまりにも理につまりすぎて共感申上げにくい感じがする。それこそ良寛和尚ではなけれども、「草のいほりに寝てもさめても申すこと南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」の「……申すこと」で結構ではないであらうか。

かの四信五品鈔にみえる富木常忍の「其義を知らざる人、唯南無妙法蓮華經と唱へて、解義の功德を具するや否や」の問いに対して日蓮聖人は「小兒、乳を含むに其味を知らざれども自然に身を益す、普婆が妙薬、誰か弁へて之を服せん、水心なけれども、火を消し、火物を焼く……」と端的にわり切っておられる心境はそれこそ、「ねごとの様に心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初めて候し程に唱る也」の宗教的超

理論のものであろう。法然上人における「唯往生ごくらくのためには南無阿彌陀仏と申してうたがいなく往生するぞともひとりて申す外には別のしさい候はず」(一枚起請文)も、それである。

法然坊の唯一向に念仏し、易行する弥陀の本願への發菩提心と、聖道唱題の専修心を私自身は区別のつかぬまま信仰に入つたといつてもよい程お恥しい了解の時代を何年か、くりかえしたものであつた。

「いま末法に入りぬれば余経も法華経も詮なし。但南無妙法蓮華経なるべし」(上堅殿御返事)の直観性をかつて私は日本天台の發展さなかにみえる「朝題目、夕念仏」の現象や、家永三郎先生の「中世仏教史研究」にみえる念仏と唱題のむすびつきを理の上に於て求めようとした愚な時代もあつた。それ自体むりな企てであり、おろかにも神も仏も恐れぬ心であり、さかしらの心であることに気がついたのであつた。

「親鸞は父母孝養のためとて一返にても念仏申したることいまだ候はず。そのゆえは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」(歎異抄)

の徹底したヒューマニズムは本質的な「祈り」以外に何物でもなく、絶対なるみ仏への帰一以外に何物もない筈であり、ここに南無帰依三宝があり、哲學的にアウフヘーベンされた

南無仏思想と自己本来の本覚思想に立つという二点がこのみのであつたことを知らされたのは不惑の年をすぎた頃であつた。

むべなるかは念仏に育ち他力本願に培われた私が中年にして唱題に転じ妙法に生き甲斐を見出し得たというものの、私は私なりにそれ丈に苦しみ続けた数年を持ちつづけたのであつた。

鎌倉仏教が印度的仏教とも中国仏教ともちがひ、また奈良王朝の仏教とも異り、真の意味の日本仏教としての性格を打出したのは鎌倉仏教が行道と実践を仏教の本質としてとらえた頃からであるといわれるが、その特質を一言に云つて法然上人と親鸞上人は念仏に於て之を表現し、日蓮上人は七字の題目に於て見事に之を結実したといひ得よう。元来、信仰生活とは、おしなべて絶対否定の立場に於て自己が自己にまみえなければならぬ生活である筈である。然らば全身全霊をお念仏に代え申そうぞというぎりぎり一拓の真宗徒の意気ごみは、又、不惜身命の法華経行者の「持経者」態度と一脈相通ずるものがある筈であり、又、このことはある意味では当然といわねばならぬ。何故に自力聖道門なり、他力本願の二門に分かれねばならぬか。あまりにも幼稚な問題と人は云お

う。しかし大衆のすべてに心から納得できる、了解し得る方法が存するであろうか。独りよがりの転業僧らしい自己満足的な説明では今の大衆は益々縁なき衆生と化するであろう。

「万法これ真如、不変によるが故に。真如これ万法。随縁によるが故に」(荆溪、摩訶止観弘決)

の随縁なるが故に一は念仏者となり、一は法華經行者となる。この二つの立場をアウフヘーベンするものは一に、その時と機の随縁であり、末法觀の現代的意義づけでなければならぬと考える。それにしてもこの現代的法華經觀による末法思想の把握の如何が私の現在をして法華經唱題にいたらしめた最大の機といひ得ようか。この辺に私自身まだまだ信と解の未熟なる事をおろかしく思う。

下山鈔に日蓮上人は、

「世間に智者と仰る人々、我も我も時機を知れり。知れりと存ぜられに候へども、小善を持て大善を打奉り、権經を以て実經を失ふとがは、小善還て大善となる。業變じて毒となる。親族還て怨敵と成がたし。難治の次第也。又、仏法には賢げなる様なる人なれども時に依り機に依り国に依り先後の弘通に依ること弁へざれば、身心を苦めて修行すれども驗なき事なり……」

とこの機微を巧みにとらえられておる。

よくよく心静かに敗戦後の世情人心をうれい真に日本国の現状に涙するものは何人かあろうが、真の愛国者の草薙にある本然の姿を思い、世に処するの至難なるこの時より急なるはない。誠に思えば左せんか、右せんか思いは千々に流れるであろう。真に己一個の幸福と榮達の為に他を顧みぬ世情に暗然たるものを覚える。小市民的な生活の波にあくせくした私自身、誠にちくちたるものがある。多くの政治家、學者、世の指導者も、あげて末法觀に對する自己超脱が本當になされておるだろうか。憎上慢も甚しい。神、仏を恐れぬ心の人のあまりにも多きを云わねばならぬ。超宗派的な世界教の生れ出ることを翼うや切なるものがある。

誠に日蓮上人よりみれば

「此由を弁へざる末代の學者等竝に法華經を修行する初心の人々、かたじけなく阿彌陀をよみ、念仏を申して、或は法華經に鼻を竝べ、或は後に此を讀て法華經の肝心とし、功德を阿彌陀經等にあつらへて西方へ回向し、往生せんとするは、譬へば竜飛が驢馬を乗物とし、獅子が野牛をたのみたる歟」(下正御消息)

である。

ここに時と機を失念しては信仰という形たいも独りよがりの自演行為に了るであろう。法華取要鈔に日蓮上人は

「安樂行より勤持、提婆、宝塔、法師と逆次に之を読めば、滅後の衆生を以て本と爲し、在世の衆生は傍なり。末法を以て正と爲す。末法の中には日蓮を以て正と爲すなり」

と端的に末法克服の態度を表しておられるし、道元はまた末法思想そのものと真向から対決して末法そのものを否定することによって末法思想を克服しているし、法然上人親鸞上人に至っては末法の機たる十惡五逆に善人、悪人の救済される道があるとする。かつて叡山に於ける最澄の末法燈明記にみえる日本天台の末法觀にその源を発した三人が三様にことなつた末法超脱をしたところに日本仏教の、そして鎌倉以後の思想史的特長がのぞかれようが、法華、念仏、密教の混然たる平安仏教に対して厳しい批判を与えたのは不惜身命の日蓮上人の態度であつた。信仰の純粹性に対しては古来、何人もその右に出るものはない。法華經信仰の純粹性を真言や念仏から洗い出すことにあつたのである。事実、これらの宗祖達の輩出した時代の背景には低俗の呪術信仰と雜然とした仏教信仰がある。

日蓮上人の伊豆配流中の作とせられるかの教機時国鈔にも「仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし」

とあり、現代の末法的症状を一個人の安易な考え方を民主思想の美名に幻惑されないで、真正にみつめる時、眞の仏道修業者のすすむべき道は自ずと明白であらうし、「私なき心」や「無我」の仏教の根本原理を、もち出す迄もなく、一仏乗の化他であり、利他の布施行を本旨としなければならぬ筈である。自然に水の流れの低きにつくが如く、教化の方法も時によつてはよしとするも、現状こそ、ある意味の現代に副うた妙法広宣の時機であり、正法宣布の時代に遭遇した時といわねばならぬ。一瞬の核兵器による全人類、全世界の破滅に近づく危険性のある現在に於て自己本位の小市民的性格に住するといふ小さな胸襟を一てきしてそれこそ大我に生きる底の眞の仏者の心境に立ち到ることは不可能であらうか。もし、しかりとすれば自ずと唱題の真義も活用されるのであるか。それにしても鎌倉期の眞の「持経者」態度を、とつて以て現代の我々自身に活用せねばならぬ時ではないであらうか。

瞬時にも惡業の因と縁にほんろうされてやまぬ吾々の現在に神も仏をも心から敬い、おそれる心をもちたいものである。最後に撰時鈔の

「夫れ仏法を学せん法は、必ず先づ時を習うべし」
の日蓮聖人の金言を以てむすびたいと思う。

襟を正す

渋谷賢応

諏訪仏教会副理事長

私の寺のすぐ前には、古代縄文文化の遺物を集めた尖石考古館がある。三キロ米程上った所には尖石遺跡がある。そのために最近では小学校の生徒より大学生まで、よく見学に来て私の寺の庭が昼食の場所となることしばしばである。また、私の寺より六キロ米程上った所に蓼科の高原がある。大人たちは近頃の観光ムードにのって、この尖石館を訪ねて蓼科に行くコースが多い。

学校の生徒が寺の庭を使って食事をとる姿も千差万別である。ある学校では先生が下見にこられて挨拶をせられ、生徒を引卒して来て跡の紙くずを焼き、バケツを借りに来てきれいに消火して行く学校もあるかと思うと、庭の木に登り、ボールを投げてガラスを割り、紙くずだらけにして立ち去る生徒もいる。これはどこの観光地、観光寺院も同様と思うが、私の所では、私の寺の参拝者でないだけに余計その上下の差を痛感するのである。

私は目に余る行為をした生徒には出て行って直接叱りとばすことにしている。生徒諸君に見れば楽しみにしていた行楽を、目的地で大喝されたでは折角のイメージのぶちこわしになると思うのだが、私は当然叱られるべき所で叱られた方がかえって気持ちよいのではないかと思っている。特にここは寺の庭である。本堂の前であるからだ。

この夏の盆すぎ頃、私が昼食をしていると五、六人の高校生が本堂の前でやはり食事をとっていた。

すると突然その中の一人が

「お寺の坊主、クソ坊主」

と大声をはり上げた。

一同は

「ワッハハ、ワッハハ」

とこれも無理に大笑している。また

「クソ坊主、クソ坊主」

そして本堂の屋根に小石を拾って投げた。

私はすぐ立って出て行って生徒に近づいたが、私が野良着だったのでこれが「クソ坊主」だとは気づかない様子であった。なおも何がおかしいのか笑いこけている。

私は近づくなり

「お前らは高校生のようだがどこの高校か言ってみろ」

と言ったらさすがに気づいたらしく口をつぐんだ。

「どこの高校だ」

と言っても顔を見合すばかりである。

「お前らは自分が毎日通っている高校の名前さえ忘れたのか」

ますます形勢悪しと見て一人が弁当をたたみだすとみなそれにならった。

「自分が苦労して入った高校の名を忘れるようではとてもものにならん。俺も昼を食べてもう一度ここにくるからそれまでに思い出しておけ。」

と言って中に入ると、弁当をたたみかけのまま逃げ出して行った。

この高校生は学校引卒ではなかったらしい。クラブ活動か何かで来ていたのではないかと思う。考古館の方には先生が居たのだが、出て来て釈明はしなかった。家内が寺の廊下を通ると壁から顔だけ出し、先の生徒が揃ってムッとにらむまねをして見せたそうである。

いたずら盛りの高校生のたあいもないしぐさであるが、この事のよって来たる意味を考えると、案外に見逃すことのできないものがある。彼等にそう言わしむる宗教観の常識が恐いのである。

現代の教育に於て、宗教の智的理解、宗教美術の観賞の場所はある。宗教の行の方面の指導はどこにもこれを施す場所がないのである。

この事の因は二つに大別される。一つは「信教の自由」を理由とする特定宗教の排除である。いま一つは絶対帰依の姿より封建性の助長を連想しての危険視である。この事になお拍車をかけるのが一般教師の不勉強である。「さわらぬ神にたたりなし」としてこの問題に触れようとししない。したがって生徒のこの方面の教養はまったく空白である。この点を空白にしておいて宗教方面の美術などを観賞しても、それが

身になるはずはないのである。食べたこともない者にデラックスな高級料理を見せるだけでは、見せられる方にとっても気の毒なことである。これでは折角古代の先人たちが身血をそいで造り上げ、多くの人々を救ったであろう仏像も、骨董品か、さもなくば偶像でしかない。「仏つくって魂入れず」とは正にこのことである。

宗教の根本は、先ず襟を正すことからはじめられなければならない。その場所環境はどんな所でもいいし、あり得べき姿としての定形もいらない。自分に対し、ものごとに対し、折り目をつけて肅然と襟を正すこと、これが宗教の第一歩であり極地でもある。

襟を正すと言うことは人生の最も美しい姿である。人生に於ての最大の願いは、それと宗教的、内面的に掘り下げれば、肅然、襟を正すことのできる人となることにあると言っても言いすぎではない。生に臨み、老に臨み病に臨み、死に臨んで、襟を正してことに当れとはこれまた釈尊がつねづね説かれた要諦である。

ところが、このことを教養すべき場所が、今の教育課程のどこにも見当たらないのである。

日本人には信仰がないと言われる。少なくとも低俗な信仰よりないとはよく聞くことばだが、その国が仏教文化に於

て、こんなかがやかしい歴史をつくったと言うことは常識では考えられない程の不思議なことである。言いかえれば、明治以前はこの「信教の自由」による不自由も、襟を正すことを忘れた民主主義もなかったのである。日本には宗教を教育する場所が普通教育の中になかったのである。日本人はその民族性に於て、もともととはあの偉大な古代美術を創造し得る国民であつたのである。

奈良の東大寺の大仏さまを完成せられた聖武天皇も、襟を正して「われ三宝の奴なり」と言っておられることは有名なお言葉である。

襟を正すことは特定宗教にも抵触しなければ、封建性への母体でもない。これを学校教育にとり入れて、少しももとる所がないはずである。しかるにそれがなされないのは明らかに教権の失墜である。襟を正さしめるすべをも知らない教師が道徳教育を行うとしても、それがまともであるはずがない。

一般はこのことを望んでいるのである。襟を正すことのすがすがしさを知っているのである。特に若い諸君に於ては尚さらこのことが好きなのだ。遭難しても遭難しても、若人が高山にあこがれて跡を断たないのは、大自然に対して襟を正すあの魅力によるものなのである。

教育に於て、襟を正すことを教導するためには教師の体験

に基づく自信と人間性による。事実、それらの諸先生方の教導を受け、今なお精進せられている多くの先生方もおられる。そこにはおのずから人を威圧せしめ、襟を正さしめずにはおかぬ迫力がある。これが教育効果をあげる上においての要訣であることは言うまでもない。

宗教の世界においてもこのことは変りない。

お念仏をすと言うことは、阿弥陀さまに襟を正すと言うことである。襟を正すことなくお念仏をしても、それは実のあるものでないことは元祖上人がしばしば説かれた。阿波之介の念仏は襟を正しての念仏であつたればこそ、元祖上人とへだたりのないものであつたのだと思う。

現今、教育界と同じく、宗教界においても襟を正すことが少なくなつてしまつた。そして不遜にも阿弥陀仏を論じ、淨土教を論じて虚偽論に終始して、不信の因を助長することを以て得々としている観なしとしない。

なすべきことは先ず襟を正して念仏することである。その中より油然とわく信念こそ、人をして襟を正さしめる迫力となるのである。

(これから本論というところですが、都合で一応打ち切り、また来年後半につづけて頂く予定です。編集部切)

表紙の解説 国宝・薬師寺五重塔水煙

西の京、薬師寺を訪れると、もつとも印象的な建物はこの寺にいま残るただひとつの奈良時代の建築、三重塔である。各層ごとに裳層(もこし)がつき、大屋根ともこしとが交互に突き出た感じはきわめて優雅で新しい感覚を呼びさませる。その姿をいつの頃からか「舞上るような塔」と呼ぶようになったが、それほど実に軽快な感じである。見ていてあきない塔こそ、この三重塔であろうか。この塔の約三割を占める相輪も見事で、その上にある水煙の天人が浮遊する光景は奈良時代の人々の憧憬の現われとも考えられる。

天人の影は時代とともに変わつてきているが、水煙の飛天の姿は素朴な中に奥深い日本の情緒をただよわせていて、眺めるものも心をなごませる。いや、あの高さではよくは地上から見えないのが当りまえである。それにもかかわらず、手を抜かない昔の人の技巧には、仏への追慕が生きていたことを深く知らされる思いがする。薬師浄土はその技術者の心中に生きていたのであろう。舞いあがる塔の飛天はだからこそ、今でも生き続けているのである。

すいえんのあまつをためころもでの

ひまにもすすめるあきのそらかな 会津 八一

(石上善応)

墓地問題

学会と既成宗教との大きな争いの一つに墓地問題がある。強制埋葬というのがそれである。自分では離権屈を出しておきながら、いざ死者がでると、所有権を持ち出して、一方的に強制埋葬するという手である。

昭和三十八年六月二十一日、津地方裁判所の判決は、こうした強制埋葬に対して、その不当性が指摘され、学会側の言い分は認められなかった。この事は、当否をめぐる両者の争いに、或る程度終止符を打った形にはなっているが、学会側は、この判決を妥当でないとして、上告論争を辞せないといきまいてゐる。それ故に、まだまだ、こうした争いは、ひき起されるものと見なければならぬ。われわれとして、こうした問題に依つて学会側と争うことは、決して本意とする所ではないが、然し、多くの祖先の墳墓を預るもの

として、こうした争いが起らぬ様、爾前に処置すべきものは、これを為し、万全を期して置くべき事は当然である。

強制埋葬に対しては、当然これを拒否し得るとしても、拒否する為の根拠を持つていなければならぬ。例えば、寺有墓地を登記して置くとか、墓地管理人の任命書を市町村長よりもらつておくとか、或は、墓地規約を明確にしてこれを公示して置くとかである。こうした準備を整えて置けば、若し強制埋葬等にあえば、「土地立入禁止仮処分申請」をして、法的にこれを拒否出来得るのである。

彼等に言わせれば、最低の管理料を支払つて置きさえすれば、後は自分の自由であると主張しようとするようであるが、少くも寺有墓地は、単にそれだけのものではない事は、今ここで言うまでもないことである。ただし、しかし、そうであるからと言って、一たん埋葬したものを掘り出す如き早まった事は、してはならない。死者に対する冒瀆であるばかりでなく、法的にも罰せられる事があるからである。そうした時は、然るべき機関、(全日仏などにもそうした対策機関がある)に相

談して、善処すべきであらう。

問題は、こうした結果にならぬ様、常日頃から檀徒を教化指導しておくべき事であつて、日頃そうした事が無視されていて、いざとなると慌てて、事をし損んずる様では、仏教徒として、面目のないことである。この点自戒反省すべきことであらう。

特に最近では、学会側でも、ほとんど日蓮正宗の寺を建て、従つて、墓地も造つてゐるので、学会員は、多くその方に行きつつある又大石寺にも大墓地が予定され、又東京では高尾霊園が新設されて学会員の為に公開されている。うかうかしてゐると、檀徒は、どんなその方に移つて行く結果となる。

いたずらに、墓地問題などで、争つてゐては大変なこととなるといわねばならない。われわれは、あくまで仏教徒としての本来の何たるかを自覚し、墓地の獲得にのみ腐心せず、教化をすべきであらう。そうする事が、又自ら墓地問題を解決する結果ともなることを知るべきである。さらに詳しいことは、「創価学会の批判的解明」にてゐる。

読者通信

小 浜 道 昭

私が「浄土」を毎月読ませて頂く様になりました。早や二年ばかりになりました。先日一年分をまとめてひもでとじ扉の御法語の欄や講義や其他大切な箇所インデックスを付けすぐ開ける様にして時々読みかへしております。中で竹中先生の選択集私解は本当に私共にもよく分る様に講義して下さいました。先月からの一枚起請文も、次が待遠しく思います。九月号で竹中先生の仰せの様に創価学会の題目や本の熱の入れ方に対し私共もお念仏をもっと実行しなければならぬとつくづく思ひまして反省いたしています。八月号の阿川先生の「私の念仏生活」を読んで少しでも見習う様に致し度いと思ひました。

さて私、以前にも申上げた事があります。長い間キリスト教の信仰に入っており

まして、その折今から考えると実に五逆の罪にあたいすると思ひますが、仏だんは偶像崇拜の対象になると思ひ二十年程前に売り払ってしまったのでした。そして今日その罪を消して下さる称名の尊さをはつきりと知らされる機会を得ました。そこで今回仏教徒のシムボルとしてお仏だんを再びおまつり致し度いと思ひています。そこで先生方におたずねいたしたいのですが、正面におまつりするのには阿弥陀さまの画像がよいのですか、又はお名号の掛物がよいのでしょうか、浄土宗徒として正しい方を（この点に関して元祖上人はどの様に申されましたか、もしそういう方面の御法語があれば）教えて頂き度いと存じます。

【お 答 え】

法然上人自身、こうした問題について、どの様にお考えであつたかは特に御法語の上では明らかに見られませんが、上人のお気持ちからすれば、たとえどんな形にせよ、自分の申しよい様にして、一向に念仏する事をお考え

になつていたのではなかつたでしょうか。しかし、われわれ申す者の立場からしますと、何かそこに対象を置いて申すのが、一番申し易いことにて、仏像を安置することとは、そうした気持ちのあらわれと思ひます。これは、いわゆる偶像崇拜という事とは、別の事と思ひます。

さて、その対象としてのお像ですが、やはりそれは、円満相好な仏像が、より身近に感じ取られるだけに宜しいと思ひますが、無理にそれと限らずとも宜しく、仏画にてもよいと思ひます。又それも入手困難とあれば、お名号にても勿論結構と思ひます。問題はそうした対象にとられる事を戒めるべきであると思ひます。

兎も角、自分に叶う様にお飾りして一向に念仏をお励みになる様、更にお願ひ申し上げます。そのことが、法然上人の心にも叶い、また弥陀の本願にもそうところとおもひます。

ますますご信心の深くなることを念じています。

（編集子）

尼寺の保育園とバス

近藤 正善

(滋賀ふたば保育園主)

琵琶湖の南、ぬのびき山のふもとに阿育王山石塔寺というのがある。これは、その下の村の石塔に、村の庄屋、宮本治郎右衛門を父として生れた明諦居士が、念仏の道場という希望のもとに、立てた寺である。そして、居士の生家は、そのまま一行山専修院という尼寺とされたのは、昭和十年のことであった。私のいる尼寺がこれである。この尼寺に、保育園が生れたことは、居士の念仏種が稔ったものと、有難く思う次第である。

居士が念仏信者になった動機は、平子山澄禪寺の住職が、家庭布教をしておられた席に、たまたま居あわせしたことであったという。そして、それ以後、居士は盲亀の浮木に遇えるが如く、猛然と念仏実践に入られたのであった。そして、今までの浄る本は、たちまち念仏の鉦鉦にかわってしまった。昼と

なく、夜となく、念仏にはげみ、線香の火が夜露に消えるまで、蜜柑箱に入れて、時間をはかった。両親に感ずかれるのを恐れて、寝たふりをして念仏されたこともあった。これが、何と十九才の時であったというから、大変なものである。一期七十八才。その生涯は念仏で一貫され、日々の生活は、念仏者のあり方を指導することと終った。

居士は、颯田本真尼について、剃髪を受けられたのであるが、明誠、明寛、明説尼は、居士の娘や孫であった。そして、すべて念仏信者であった。これらの人々は、三河の徳雲寺で修行したのであるが、厳格なこの寺での修行も決して苦にならなかった。これらの人々は、家にいる時は、大蔵書一本の念仏を申さぬ限り朝食を食べさせてもらえぬ生活をしてきていたからである。居士の家庭における

子供の、指導は、この様であった。

しかし、この居士も、父母に念仏を申させるのには、大変苦労された。日曜別時の外、四十八夜の別時には、皆勤貢として銘仙一反を出して、念仏をすめるといった具合であった。晩年には、日課礼拝帖に、何千礼と記されている。居士の着物は、皆ひざがぬけていたといわれる。聞法の為には遠国にも走り、念仏の達人と聞くと、招請して、村の人々に話しをしてもらった。居士の前には、どんな宝も念仏の比ではなかった。

「私に念仏がなかったならば、苦難の道に堪えることは、できなかったであろう」

とは、常に居士が述懐されていたことであった。居士の生活の一つ一つを聞くごとに、口称の大利に驚く次第である。自ら、三昧道場を建て、選択集を読みつつ、落涙されていたことも、しばしばであった。特に、横川の法語は、この上なく愛しておられたという。

こうした居士の遺徳をしのんで居士の三十三回忌を記念して、保育園をつくることとした。そして、早速、その申請をして保育園を設立したのであるが、何分にも地の利が悪

く、六〇名の園児を確保することは、仲々大変であった。これを打開するには、通園バスを持って、募集区域を拡大するより道がなかった。しかし、第一、それだけの資金がない。専修院が設立された当初、尼僧養成のための資金源にもと、買われていた田畠も、農地法の為に、全部接収されてしまい、僅かに寺だけが残っている。町に助成を依頼したが、小学校の給食にさえ踏み切れぬ町であつては、頼みにならぬ。バスを買うとすれば、運転手も置かねばならぬ。

私達には、田地が無くなってから、托鉢をすることが、一つの習わしとなっていた。私は、この托鉢に頼って、バスを買い、保育園を充実し、幼児保育に励み、居士の念仏生活を、この中に生かそうと考えた。それから、毎日托鉢に励んだ。いよいよとなれば、自分でバスの運転もやろうと、覚悟をきめた。

そして、終に、私達は、その目的を達成することができた。自ら運転もするようになった。お念仏にすべてを托し、命をあずけて努力した。命をあずけて念仏すれば、命はおろか、手足を伸して働く原動力まで与えて頂け

た。居士の念仏生活の足元にも及ばぬものながら、私は、その中に大きな生き甲斐を見出して行った。今日、この保育園があるのも、このバスがあるのも、すべて、念仏の力



であると、有難く思っている。

幼児を見ていても、親の無い子は、何となしに力が無い。お念仏の中に、命の親様の実感を得ている者は、何となく大きな底力がで

てくるものである。

計算を離れた托鉢生活から、計算づくめの保育園の為の托鉢に切換える勇気が出たのも、念仏のお力であつた。そして、この保育園は、実は、明諦居士の念仏の具象化されたものに外ならぬと思い、日々、念仏の中に喜んで働いているしだいです。

新年号予告

講話

椎尾辨匠法主

法然上人と現代

田村円澄氏

誕生寺

漆間正徳氏

正月はなし

ーハワイ、沖縄、朝鮮

中国浄土教物語

牧田諦亮氏

創価学会の批判的解明

(全日仏発行)

担当幹事 竹中 信常

安居 香山

創価学会の実体調査に基づいてその教義と現況を解剖批判する本書によって、学会からの不安一掃す(¥一五〇 千五〇)

申込先 法然上人讃仰会



近代高僧伝

大島徹水

大橋 俊雄

濃尾平野が三河に接するところ知多郡横根村に源次郎が呱呱の声をあげたのは明治四年三月十五日のこと、父を大島次郎兵衛、母さゝいといった。九歳の時伯母に当る蔡華庵の尼僧が一人留守をまゐる源次郎に出家しないかと勧め、立ちどころに許諾をあたえた彼は、畑に鋤とる母にその旨を知らせ、新らしい着物にきがえて同伴し、中山貞照院の門をくぐり戒壇和上のもとに弟子入りすることになった。母が小供の言を素直に聞き入れ、父親の許しも得ないで出家させたのには、子守に背負われ鎮守の森に遊んでいた頃、巡礼の一人が「この子が若し坊さんになったら、さ

ぞかし出世するだろう」といった予言めいた言葉に耳にし、又親戚の人達を通じて戒壇和上のよい評判をきき、若しその寺の弟子となつたならば本人の将来はさぞ幸福なことであろうと、かねがね考えていたからであつた。得度して名は崇法とかえられ、後に徹水と改められて如法に修行した彼は、浄土宗高等学院から専門学院に学び、三十六年七月業を終え、翌年四月には招かれて第五教校の教授となつたが居ること七年、四十四年九月には洛西北野の成等庵の復興を志して其の職を辞し、専らこれが復興に努力されることになつた。しかし単に復興といっても容易なもので

はない。無檀無縁で何等の収入とてない。朝から晩まで三河の味噌汁、それに絶対の精進で縁にまかせて勤勞に歩きまわられたけれども、知人としてない京都では寄附とて集まらず「廃寺の復興はむづかしい、容易にできるものではない」と時々深い溜息をついておられたという。大正元年阪根弼兵衛の強い懇請によつて、一時は廃校と決めたけれども強い反対と維持を続けていこうという尊い人たちの支援のあつた家政女学校に關係をもつようになり以来一進一退あつたけれども終生女子教育に一身を捧げ、昭和九年十二月には推されて大本山増上寺の法主となつた。当時の増上寺は僧財もあり、大殿の莊嚴も十分ではなく、加うるに十八万坪にのほる境内地が東京都の所有になつており、これが復歸という問題もあつた。従つて例え法主となつても目前には多難が問題がひそんでおり、家政關係や京都在住の知友の人の中には家政の發展を妨げるのではあるまいか、又二足の草鞋ははけまいと忠告する人もあつたが、矢吹慶輝や増上寺一山の人たちの強い要望によつて、一カ月の半分は家政にあつて校務をとり、半分は

増上寺に在住して寺務にあたるという約束で住職することになった。しかしさきで置かれてみると、はたの人たちが心配したことは杞憂にすぎず、多額な借金がかたづき、都々となつてゐた土地は増上寺の手に帰し、大殿の莊嚴も完成すれば開山西譽聖聴上人の五百回忌を記念して總和殿も新築され、名実共に東都の本山としての性格を整えることができた、

彼は律院の出であり、精進をもつて終生を通された。煙草もすわなければ、酒の類は勿論、魚や肉も絶対に口にしない。維新前の僧侶は精進が当然であり、殊更精進であつたと添えるまでもないが、時代と共に周囲の事情は精進をもつて一貫することを容易でなくせしめた。にも拘らず一生を精進で通した所に、彼の偉大な一面があつた。何かの機会に出かけられ料理が出、中に魚肉が入つてゐると精進ものと交換して食べられたこともあり、増上寺入山後巡錫などの折は出かけられる前に、必ず相馬家に電話して車中の弁当をお願ひするのが常で、時にうっかり味噌汁の中に鯉節の一片でもあれば箸をもたれること

はなかつた。そして衣服はきまつて鼠木綿の着物で、絹類は一切用いない。「絹の着物のいただいたのが沢山ありますから、お召しになつて下さい」といわれても、「絹は冷たいからいやだ」と答え、又洋傘の余りにもいたんでゐるのを目にし、絹張りの傘を買つて来ても彼は決して喜ばれず、かえつて「なぜこんなものを買つて来たのか、私は絹の傘は使はないからすぐ返してくるように」といわれたという。これというのでも絹類は律で厳しく禁じてゐるからであり、鼠衣を身にしたのも律院では茶・浅黄・鼠の三種しか許してゐないからで又彼は極めて節儉を重んじた人でもあつた。「物を粗末にするような人は、決して成功しない。阪根さんは決して物を粗末にせられなかつた。阪根さんの着物は幾度も上に下にぬい直してあるから古着屋でも買はなかつた」と時折述べ懐し、タオルの手拭がまるで網のようになって、下駄が煎餅のように薄くなつても、何等気もかけることもなしに使用され、道におちてゐる紙をもつて用をたしたこともあつたという。風采に関しておかまいなしであつたといふことは

決して非衛生的だといふことではなく、少しの無駄でもすまいという考えのもとになされた発露のほとばしる持律生活の一端からで、又何か人をひきつける力をもつてゐた。

曾つて相馬黒光が「私など始終動揺してまことに精神が定まりにくい。いつでも何か悩んでゐる。心の曇りがきれいに晴れるという時がない。そこへ大島御前様がいらっしゃると、私はただ前に坐つて御十念をいただく、そうすると不思議にすまつて心が明るく和らいでくる。どういふお力なものか、何の特別なものもなくそれであつた。何ともいえない大きな慈味であつた」といつてゐるのも、彼の量感を通しておそいかかつてくる何ものかがあつたからであらう。

かくて一生を成等庵をはじめ、彼の住した金勝阿弥陀寺・安土浄嚴院・芝増上寺等の寺門と家政女学校の経営のために捧げたが、病には抗するすべもなく昭和二十年一月二十四日静かに念仏となえながら眠るが如く、七十五歳の一生を安らかに終えられた。法名を広蓮社清普上人真阿三来徹水大和尚という。

一枚起請文講話（完）

学者と念仏

村瀬 秀雄

（大正大学幹事）

但し三心四修と申すことの候は、

念仏を信ぜん人はたとひ一代の

皆決定して南無阿彌陀仏にて往生

法をよくよく学すとも、一文不知の

するぞと思ふうちにこもり候なり。

愚鈍の身になして尼入道の

この外に奥深きことを存せば、

無智のともがらに同じうして、

二尊のあはれみにはづれ、

智者のふるまひをせずして

本願にもれ候べし。

只一向に念仏すべし。

一、念仏は総てを包含す

法然上人は十五歳にして比叡山に登り、翌年から天台学を学んで、三大部六十巻を三年間に習得し終りました。その後法相宗、三論宗、華嚴宗、四分律宗、禪宗等を学んで仏教の蘊奥を極め、智慧第一の法然房とたたえられるに至りました。しかし上人の求められる出離の要道は学問では得られず、結局は自力で救われないとされました。ここに新しい仏教信仰の黎明があったのです。乱想の凡夫が救われるためには念仏しかないとしたところに初めて仏教が庶民のものとなりました。四万八千の法門を煎じつめ、純化したところに念仏が残りました。

法然上人は経藏に入って善導大師の著書をみて豁然と覺られたといいますが、それまでに仏教に対する新しい意義の発見に努められたからこそ、こうした仏教の改革、新仏教の創始となって現われたのです。ここに三心も四修もみな南無阿彌陀仏と唱えることによって満足されるというお言葉も、新しい意義の発見、教義の純化の一つであります。

三心というのは念仏を申す時の心の持ち方を説いたものです。その第一には真実の心、誠をつくす心のことで、至誠心といえます。とかく内面の充実をはからずに外面だけを飾ろ

うとする心が誰にもありますが、これは卑しいことです。何事を行うにも真実の心を以て当たるべきですが、念仏を申すのに誠心がなかったならば往生できないとされています。

「外に賢善精進の相を現じて、内に虚偽をいだくものは、日夜十二時につとめおこなう事、かうべの火をはらうがごとくするとも、往生をえずと也。ただ内外明闇をえらばず、真実をもちゆるゆえに至誠心となづく」(要義問答)

その第二には確固たる信念の下に深く信ずる心のことで、深心といえます。ただ深く信ずるといっても、どの程度の深さというのか計れないものでしょうか。法然上人の心の深さを次のお言葉で存知したいと思えます。

「もし一切の智者百千人きたりて、経論の証をひきて、一切の凡夫念仏して往生する事をえずといはんに、一念の疑退の心をおこすべからず」(要義問答)

また第三には信仰の目標に一切を向ける心のことで、回向発願心といえます。二兎を追うものは一兎も得ないように、一つの目標に一切をあげて向うのでなければ満足な結果が望めません。このことを法然上人は次のように説明されます。

「一切の善根をことごとくみな廻向して、往生極楽のためとす。決定真実の心のうちに廻向してむまるるおもひをなす也」(要義問答)

このように三心は、念仏を申す時になくてならぬ心ですが、そればかりでなく、日日の生活の上にもぜひあつて欲しい心の持ち方があります。三心というと何か特別な心のようには思われがちですが、実はいつでも誰でも望ましい心構えであります。ただ念仏を申す時には同じ心でも一層純粹に、また高い程度にと要求されるわけがあります。

念仏を申す時に、この三心が必要であるということは觀經に説くところで、善導大師が詳しく注釈されています。この注釈において善導大師は、三心の内の一心でも欠けることがあれば往生できないといわれています。つまり三心が具っていて、その上で念仏を申すのでなければなりません。それなのに法然上人は心から念仏を申せば自然と三心が具わるとされました。三心という言葉すら知らぬのが凡夫の姿です。

「たとえ三心の名をだにもしらぬ無智の者なれども、弥陀の誓を頼奉て、すこしも疑う心なくして、この名号を唱れば、この心が即三心具足の心にてあるなり」(勸修御伝第二十一) 凡人は無智であると同時に、煩惱のとりことなっています。こうした凡人が念仏を申しても、はたして三心が具っているのかどうか一見しては判り難いのですが、素直に信ずれば同じく三心が具っています。法然上人は三心を月にたとえ煩惱を葦にたとえて、次のように申されました。

「人目をかざらずして、往生の業を相續すれば、自然に三心は具足する也。たとえば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よくよくたちよみてみれば、あしさをわけてやどるなる。妄念のあしはしげけれども三心の月はやどるなり」(諸人勸化の御詞)

そして善導大師の注釈を次の如くい直されました。

「善導の釈を拝見するに、源空が目には、三心も南無阿彌陀仏、五念も南無阿彌陀仏、四修も南無阿彌陀仏なり」(勸修御伝第二十一)

ここに五念というのは、念仏を申す人の有様を五つの状態に分けて申した言葉です。即ち(一)身体は阿彌陀さまを礼拝し、(二)口に名号を唱え、(三)心では常に往生極樂を願ひ、(四)學問をして智能をみがき、そして(五)正しい見解を持つようになるという五つを五念といっています。

次に四修というのは、念仏の申し方を四つに分けていった言葉です。その第一には敬いおがむ生活のことで、恭敬修といっています。ここではもとより阿彌陀さまを敬いおがんで念仏することですが、更に広く恩師や友人、一般の人や自分の仕事に対してまでも敬う心を含んだ言葉であります。その第二にはひとすじに念仏を申す姿のことで、無余修といっています。ひとすじということば、混り物のない純粹な行為のことで、

あれこれ迷って行為が分散することのない生活をいいます。

また第三には念仏で一貫し、すきまのない生活のことで、無間修といえます。一つことに専念する生活をいいます。最後の第四は以上の三つの生活態度を生涯を通じて持続させてゆくことで長時修といえます。以上四つの正しい生活態度を列挙しましたが、第四の長時修が根本をなしています。

すでにお気づきのことと思いますが、三心にしろ四修にしろ、これらは念仏を申す場合のみでなく、広く一般にかくありたい理想の姿であります。そしてこうした姿は、念仏を申すことによって充されます。念仏は一切を包含しています。

二、諸宗に越えた浄土宗

以上申し述べてきたことは、簡単ながら念仏についていい尽しているのです。従ってこの外にまだ何かしら奥深いものが別にあるのだとすれば、釈尊と阿弥陀さまの慈悲にはずれ、本願にもれて往生できません。法然上人がこのようにみ仏の前に誓われました。このお言葉から一枚起請文という名が生れました。

ここで余談のようですが、念仏を申す者にどんな利益があるのかをみることにします。こんなお言葉があります。「およそ五種の嘉譽をつたえ、二尊の影護をこうむる。これはこれ現益なり。また浄土に往生して、乃至成仏す。これはこれ

当益なり」(選択本願念仏集)

五種の嘉譽というのは、善導大師が念仏を申すものは人中で最も勝れているとして五種類のほめ言葉を列挙したことをいいます。浄土宗で譽号という言葉のあるのは、ここから出ています。そして念仏行者には慈悲の観音菩薩と智慧の勢至菩薩とが影の形に添うように、いつもそばから離れずに護って下されています。この両菩薩が日夜に付添って下さるということが現世に受ける利益であります。そして命終ってから浄土に往生するという利益があると申されたのです。

さて、人はまず自分を知らねばなりません。自分の素質と能力を十分知り、その上で自分のおかれている環境と社会情勢を判断してゆく必要があります。己が知識や財力や素質を無視し、社会にそむいて希望を達しようとしても、その努力は無駄な労力といわねばなりません。このことは仏道の修行についても同じことがいえます。即ち

「仏道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるべきなり」
(念仏大意)

との御注意がそれです。ところが実際に自分を省みてみれば、乱想の凡夫にすぎないことが判ります。また今の時代はどうかといえは、各種の暴力と虚偽が蔓延しています。従って誰でも救われるということは、どんな罪深い凡夫であって

も、容易に修行ができ、必ず救われるものでなければなりません。このような信仰は念仏以外に求めることができません。「下品下生はこれ五逆重罪の人なり。しかるに能く逆罪を減すること余行の堪えざる所。唯念仏のみありて、能く重罪を減するに堪えたり。故に極悪最下の人の為に、極善最上の法を説く」(選択本願念仏集)

として、更に無明という病源のために重態に陥った者に対して、念仏は体質改善の妙薬であると申されています。また法然上人は念仏のことを不老長寿の薬である阿陀伽薬のようなものだともいわれています。

このように念仏は精神的万病を治す薬であるばかりでなく、各種の修行の内でも最も勝れた行であります。これを逆にいえば念仏の行者は人として最もほまれ高い人なのであります。かくて念仏はあらゆる要件を満足させています。

「浄土一宗の、諸宗に越え、念仏一行の、諸行にすぐれたりという事は、万機を摂するかたをいうなり」(勸修御伝第四十五)

と自信に満ち、信念に燃えたお言葉があります。

三、念仏と学問

次いで法然上人は念仏の行者に対する遺誠を述べられて、一枚起請文の結びとされました。即ち

「本願を信じて念仏を唱える者は、たとえ釈尊ご一代の教説、法門について十分な勉強を積んでいても、自分を無学文盲の愚者と何ら異なる所がないとし、また街頭に門付している卑しい男女と同じものだとし、そして少しでも智識人ぶった動作や分別をすることなく、ただひたすらに念仏しなければいけない」といわれました。

法然上人は早くから智慧第一と評判されていたのに、ご自分ではご自分のことを黒白も知らぬ童子のようだとされ、また愚痴の法然房といわれました。このように学問があっても学者ぶらぬことを同愚といっています。学問が進むに従って逆に学問の奥深さが判って、勉強の不足が判りますが、これを還愚といえます。法然上人は学問を尊重し、生涯を通じて勉強に精励されました。しかし学問は学問であって、いか程法門を学んでも、それが直ちに信仰と結びつくものでないとされました。同愚とか還愚とかいっても、学問を軽視するものではありません。余裕があれば勉強すべきであり、少しでも悪から遠ざかり善に近づくべきだとされました。

ただ法然上人は阿弥陀さまと向き合っておられたので、こゝと信仰の上では智者も愚者も同一線上にあるのです。だから学問をした者が、自分を他の者とは違う者、勝れたものと思うようになると逆に信仰から遠ざかることになります

「アンケート解答」

阿 川 貫 達

(大正大学教授)

「学生骨となりて、念仏や失わんずらん」(常に仰せられける御詞)

とのお言葉はこの間の消息を申されたことであります。智者も愚者も、善人も悪人も念仏によって救われるということ、法然上人は法爾の道理であると申されました。法爾の道理というのは、炎が空にのぼり水が谷に落ちるという自然の法則ということであります。

浄土教は当時の世相と人心に適応しました。そのため燎原の火の如くまたたく間に、念仏が全土を風靡しました。これこそ念仏の行われる機運に再会したというべきものでした。

「浄土の教、時機を叩きて、行運に当るなり。念仏の行、水月を感じて、昇降を得たり」(選択本願念仏集)

このお言葉は法然上人の結論的なものであります。月はどうな山奥をも遍く照しています。そして月光はどんな賤家の水の上にも美しくその姿を映します。これは月が地上に降ったからでもなく、水が天に昇ったためでもあります。水と月とは互に感応し、一体となっているからです。これと同じように阿弥陀さまと衆生とは、念仏によって一体となり、そこに少しの間隙もありません。

このお言葉を拝するたびに、しみじみ法然上人の感懷を味い得るように思います。

1 渡辺博士は正しい思察力を以て書かれているが、少しく浄土教を知れる者には誤りと思える事をそのまま引用せられたり、過言、独断論と史料される辺もある。然しこのような問題を提げて学者の研究を振起する点は多とし感謝します。

阿弥陀教が印度に行われた証拠一二をあげる。月氏の支婁迦讖が竜樹の生誕に先だつ数十年光和二年(四四)に訳された三摩般若三昧經(梵語藏語)には般若三昧法により阿弥陀仏を見ると明す。これ大乘初期成立の經典で弥陀經中最古の文獻と云える。又竜樹菩薩勸誡王頌(梵語、唐義淨訳700)に生老病死の三毒除かれ仏国に託生して世父と爲り、寿命時長量知りがたし波の大覺弥陀主に同じの文、(王とは南嶺薩羅國王婆多婆訶深く竜樹に皈依)。又楞伽經第九(梵語元魏菩提流支訳513)の仏の應記に、師は(竜樹)南大國に出世して有無の見を破し大乘無上の法を説き歡喜地(初地の菩薩)を証得して安樂國に往生せんとある。具等は何れも印度に弥陀經流布を証する。文獻といえる。

2 渡辺氏とその反思想との論争は未了と思う。各その努力は喜ぶべきであるが今や各自の本領に立還つて智行兼修を望むものである。仏教は真俗二諦の雙修を以て本真の大義を顕彰するものと思う。真諦門は俗諦門を離れず俗諦も真諦を離れない。真俗不二の境地が必要である。徒らに理論に沈みて實際を忘れるものは真の仏教ではない。真諦門の真智のみを尊んで俗諦門の指方立相等を輕視するは仏教本然の教旨ではないと思う。

(尚3についても返答を頂いたが紙面の都合で略させて頂きました。)

若い学徒の研修会

このごろ東京でも京都でも、若い学徒が盛んに研修会をやっている。特に東京では、増上寺山内の一寺で毎月一回、大正太学の助教、講師、助手クラスが、選択集を読んで、専門の違う学徒が、自分なみよと、法然上人に直参してみようというもので、仲々成んな議論で、夜のふけるのも忘れてゐる。

一つは椎尾法主を囲んでの研修会である。この所、ますます元氣な法主が、浄土教と戒律の問題をひっさげ、若い者と大いに議論している。鑑真和尚のことも、盛んに論ぜられ、九月には、NHKから放送もされた。「十分じゃ、何も話せやしない」と仲々の元氣。目は鑑真和尚と同様、殆んどみえない。

研修会が盛んであることは、やがて浄土

がますます盛んになって行くきざしである。

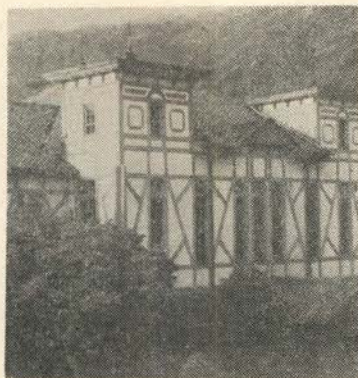
宗立学校の発展

高等学校は、この所、何処もブームで盛んであるが、宗立学校も、夫々發展して、止まるどころを知らない。東京の芝高校も松本校長の努力で殆んど校舎は鉄筋で完成して、今度は一億近い金で体育館を設備するとか。東海高校では、林校長の努力、ますますその実をあげ、短期大学を設立するまでになった。

京都の東山高は、私立では最高の競争率とかで、藤原校長は鼻高々。名物の古い校舎も、いよいよ近代建築に変わるらしい。水野校長の華頂学園も、今改築中。何処まで發展するか、分らない。三枝樹校長の家政学園でも、短大寮が完成した。高校の宗教教育の必要が論ぜられている今日、こうした学校が發展することは、誠に結構なことである。

この外、京都の仏教大学では、図書館が

改造されて、鉄筋三階建てとなり、この程、落成式が盛大に行われた。いずれにしても、宗立学校の發展は宗門の大きな力である。



(東山高校旧校舎)

◆御法語をいただく◆

念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば即ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが為に難を捨て易を取りて、本願としたまふか。若し夫れ造像起塔をもて、本願としたまはば、貧窮困乏の類は、定めて往生の望を絶たん。

(選択本願念仏集)

もし仏教が学問のあるもの財産のあるものだけの信仰であつたとしたら、つまらぬ宗教といわねばなりません。もともと仏教には多くの法門と修行とがあつて、それを学び実践することは立派なことに違いありませんが、難しいが故に尊いということにはなりません。誰でもどこでも何時でも信仰することができ、修行できるものであつてこそ庶民の仏教ということができます。

もし阿弥陀さまが造像起塔の如き大金を要し、富裕のものしかなし得ないことを本願としたならば、一般の人々は絶望せざるを得ません。阿弥陀さまは総ての人々、つまり智者も愚者も、富者も貧者も、聖者も罪人

も差別なく救はんとして誓願されました。そのために難行を捨てて易行を本願とされたことと思います。阿弥陀さまが念仏を申す者を一切救うと誓われたのは、こうしたわけがあらうからです。

念仏は易行であるから総ての人に、総ての時代に、総ての機会に適合します。念仏以外の諸行は難行であるがために、このように総てに通ずるというわけにはゆきません。

心には阿弥陀ほとけ助け給えと思ひ、口には南無阿弥陀仏と唱へることは、たしかに易行であります。心に悩み多いもの、逆境に立たされた者はかえつて易行を易行として信じ易いものです。学問あり富ある者の方が、どうしても己惚れがあつて、素直に信じる事ができない場合があります。

しかも念仏は易行であるばかりでなく、諸行より勝れています。

「念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。故にいかんとなれば、名号は万徳の帰する所なり」と法然上人が申されています。このお言葉をいただけてます——お念仏を申しましょ

年末・年始の施本

仏教の生活

新春を迎えて／だるまさんのコレクション／七福の戸籍調べ／むかしむかしのお話／俳句／グラビア／芽ばえる信仰／忌日早見表／心経を尋ねて、など新年にちなんだ楽しい読みものをおすすめします。

一部二十円五十部以上一部十二円
＝実費見本三十円切手を申込

東京都文京区湯島三組町一三

仏教書
専門

中山書店

電話(831) 八四九四

日本一の生産・設備

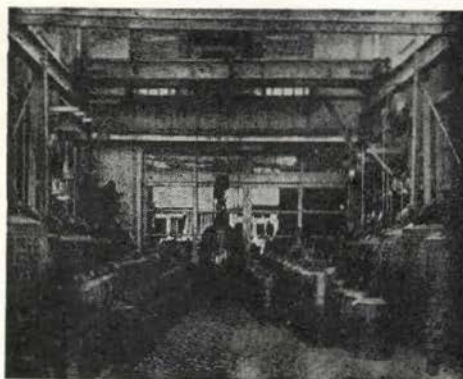
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鐘物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田

編集後記

▽本号をアマダ信仰論争特集とした。世論におどらされてやったものではない。問題がどこにあるかを見きわめてもらい、これを契機として、より確固たる信仰を強めていただきたかった為である。黙否するののも一つの道であるが、もっと積極的なものがあってもよい。

▽新年号からは、牧田諦亮博士の中国淨土教物語を、連載する筈です。ご期待下さい。また、祖師達の教えを、もう一度、現代の立場で見ても、必要の特集と考えています。新年号では、田村円澄氏に登場して頂き、法然上人をとりあげます。

▽これで今年も終ります。来年も、大いに努力いたします。ご協力下さい。よい年を迎えて下さい。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十一年十一月廿五日印刷

昭和三十一年十二月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京三三二局五九四番

振替東京八二一八七番

定価金五十円(六円)

浄土

第二十九卷

第十二号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十一年十一月二十五日印刷 昭和三十一年十二月一日発行